

令和 6 年 5 月 13 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01890

研究課題名（和文）日本企業の立地選択行動と海外事業経験に関する実証研究

研究課題名（英文）Location Choice Behaviors and Foreign Experiences of Japanese Firms

研究代表者

竹之内 秀行（TAKENOUCHI, Hideyuki）

上智大学・経済学部・教授

研究者番号：90297177

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本企業の立地選択行動について、研究を行った。その際には、特に海外事業経験に着目した。

まず、1980年代後半から2015年の日系自動車部品メーカーの中国投資のデータベースの構築・精緻化を行った。そして、理論研究と実証研究を行った。その結果、次の2点が明らかになった。第1に、企業の国際事業経験に関する理論研究を通じて、重要な研究課題が明確にした。すなわち、国際事業経験を動的にとらえる視点とマイクロ・ファウンデーションへの注目である。第2に、自称研究を通じて、既存の参入地域から近い地域を、立地選択する傾向がある、直近の国際事業経験が立地選択へ影響及ぼすことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際経営研究における重要な概念として、「外国企業であることの不利益（LOF）」という概念がある。すなわち、外国企業は海外市場において、現地企業が負わないような追加的コストの負担を余儀なくされているのである（Zaheer, 1995）。

本研究では、この重要な概念に対して、国際事業経験という視点から接近するとともに、実証研究を行った。したがって、本研究の学術的意義と社会的意義は2つある。1つは、国際経営研究という文脈の中で、国際事業経験という概念と先行研究の検討から、将来の研究の方向を明らかにした。第2に、国際事業経験が日本企業の立地選択へ与える影響を、一部明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the location choice behaviors of Japanese firms, especially focusing on their international business experiences.

Initially, we developed and refined a database of Japanese auto parts manufacturers' investments in China from the late 1980s to 2015. Subsequently, we conducted theoretical and empirical research. As a result, we revealed two main findings. Firstly, through theoretical exploration on firms' international business experiences, we clarified important research issues, namely, the dynamic perspective on international business experience and the importance of micro-foundations. Secondly, our empirical research revealed that (1) Japanese auto parts manufacturers tend to choose locations near existing entry regions, and (2) recent international business experiences have an impact on location choice.

研究分野：経営学

キーワード：相互依存的投資行動 国際事業経験 新興国市場

1. 研究開始当初の背景

国際経営研究における重要な概念の1つに、「外国企業であることの不利 (Liability of Foreignness : 以下LOF)」がある。LOFは、Hymer (1960)に端を発する概念であり、国際経営研究はこのLOFを前提としてさまざまな研究課題に取り組んできた。

先行研究の多くでは、LOFを「多国籍企業の本国と受入国との距離」として捉えてきた。代表的な研究が、Ghemawat (2000)である。彼によれば、本国と受入国の距離が大きくなるほどLOFは大きくなるため、外国企業は本国と受入国の距離を勘案しながら立地選択を行うことが推奨される。また、本国と受入国の距離に関する研究では、地理的距離にとどまらず、文化的距離や制度的距離などさまざまな側面から距離を測定し、立地選択や参入モードとの関連を議論してきた。

その後、LOFと立地選択に関する議論は大きく2つに分かれて展開されたが、その1つに、現地市場における事業経験に注目した議論がある。国際事業経験に関する議論は、LOFを捉える尺度であった距離概念へ影響を及ぼした。従来の研究では、Ghemawat (2000)に代表されるように、本国と受入国の距離は暗黙裡に外生的なものとして捉えられていた。距離は企業にとって与件であり、企業は距離を勘案しながら立地選択が行うという示唆はその証左である。しかし、事業経験という概念を取り込むことで、最近の研究は距離を動的なものとして捉える方向へ進みつつある。受入国と本国の距離は、海外市場で事業経験を積み重ねることで変化するのである。

以上のような学術的な展開を背景としながら、本研究では研究目的を設定した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本企業の立地選択行動を明らかにすることにある。その際には、鍵概念として「海外市場における事業経験」に着目する。

こうした目的を設定することの貢献として、3つの貢献が考えられる。第1に、「外国企業であることの不利 (LOF)」という国際経営研究における重要な仮定に取り組む点がある。LOFのために外国企業は、現地企業が負わないような追加的コストの負担を余儀なくされるのである (Zaheer, 1995)。多くの研究者は、こうしたコストを相殺するために必要な企業特殊の優位性に関心を寄せてきたが、その一方で追加的なコストそのものには十分な関心を寄せられてこなかった。本研究では、この重要な仮定について捉えなおすことを試みる。

本研究の第2の貢献は、先行研究において取り上げられてきた国際事業経験の概念の精緻化に取り組む点にある。既存研究では、国際事業経験を経験年数として測定することが多かった。しかし、国際事業経験とはいえ、どこで国際経験を蓄積したのか、そのように国際経験を蓄積したのか (海外市場への参入モード)、どのような国際経験を積んだのか (事業内容)、だれが国際経験を蓄積したのか (現地化の程度) によって、事業経験にも違いが生まれると考えられる。こうした事業経験という概念の精緻化を通じて、海外市場における学習という視点から立地選択へ接近する。

第3の貢献は、大量サンプルによる定量的研究によって、国際事業経験が立地選択へ与える影響を検証する点にある。事業経験、立地選択、距離の関係について、日本企業の海外進出を対象とした実証研究はほとんどないのである。

3. 研究の方法

研究方法について、3つのパートに分けて記述する。1つは、先行研究の検討と分析フレームワークの整備である。2つ目は、データベースの構築・精緻化である。3つ目は、定量的分析である。

(1) 先行研究について国内外にわたって収集し、理論的研究と実証研究について検討を行った。特に、国際事業経験については、Journal of International Business Studies、Strategic Management Journal、Academy of Management Journalなどの戦略・組織分野の研究を広く検討した。

(2) 本研究では、日本企業の自動車部品メーカーの中国市場向け投資へ対象を絞った。自動車部品メーカーの中国投資に関するデータは充実しており、データの入手が可能であった。くわえて、数多くの自動車部品メーカーが中国進出しているうえに、複数の在中子会社を設立している企業が多く、事業経験の影響を検討するうえでも、有効な対象である。

データベースの構築・精緻化の第一歩として、日本の自動車部品メーカーの中国進出に関する基礎的な情報の収集と確認作業を行った。具体的には、①自動車部品メーカー名、②中国法人名、③設立時期、④設立省、⑤出資比率、⑤生産品目に関するなどのデータを収集した。次に、⑥中国市場での事業経験、⑦事業存続の有無など、に関するデータを収集した。第3に、自動車部品メーカーのトップマネジメントチームに関するデータとして、⑧年齢、⑨性別、⑩国際事業経験、に関するデータを収集した。

データ収集に際しては、3点に注意を払った。1つは、複数の情報源にあたることで、情報の精度を高めるように努めた。2つ目は、一方向的なプロセスではなく、繰り返しデータの確認作業を行った。第3に、1人でデータの確認を行うことなく、2人以上が同じ作業に携わるよう

にした。それによって、データの信頼性の向上を図った。

(3) 構築したデータベースを用いて、定量的な分析を行った。そして、その結果については、学会や研究会において報告を行った。

4. 研究成果

以下では、先行研究の検討、ならびに構築したデータベースによって可能となった大規模サンプルによる統計研究を通じて得た知見について報告する。

(1) 海外市場への進出は、「外国企業であることの不利 (LOF)」にさらされながら、行われる。そのため、Johanson and Vahlne (2009)は、国際化を学習プロセスとしてとらえ、本国と文化的・心理的距離の近い市場からスタートし、徐々に文化的・心理的距離の離れた市場へ進出する、と論じてきた。つまり、国際経験を通じて、不確実性やLOFを低減させるのである。しかし、国際事業経験もさまざまである。経験にも、幅もあれば、深さもあるし、集中度もある。したがって、国際事業経験のタイプに応じて、立地選択へ与える影響も異なる可能性がある。

こうした問題意識から、実証研究を行った。対象は、1988年～2005年までの日系自動車部品メーカーの中国市場における立地選択である。加えて、対象を中国に複数拠点を有する企業に絞った。分析手法としては、条件付きロジット分析を用いた。その結果、以下のことが明らかになった。①2度目以降の進出においては、国際事業経験が深い場合、最初の拠点から地理的距離と経済的距離が近い地域を、立地選択する傾向がある、②2度目以降の進出においては、国際事業経験の幅が狭い場合、最初の拠点から地理的距離、経済的距離と制度的距離が近い地域を、立地選択する傾向がある、③2度目以降の進出において、国際事業経験の集中度が高い場合、最初の拠点から地理的距離、経済的距離と制度的距離が近い地域を、立地選択する傾向がある。こうした分析結果の示唆として、2点あげることができる。1つには、事業経験を通じて活用した立地特殊知識は適用範囲が限られており、異なる地域で用いるには、その立地で培った優位性に修正を加える必要がある。もう1つには、進出地域において長い事業経験を積むだけでなく、多くの地域で経験を積むことが必要である。すなわち、探索の幅を広げることが、新たな事業展開へとつながるのである。

(2) 日本の自動車部品メーカーの対中投資を対象として、国際経験を活用するトップマネジメントチームに注目して、取締役会の構成が企業の相互依存的立地選択行動へ与える影響について検討した。対象としては、1987年から2005年までに中国へ行われた海外投資を対象とした。その結果、以下の点が明らかとなった。第1に、取締役会のターンオーバー比率が低いと、本国同業他社の立地選択の影響を受けやすい。第2に、取締役会の平均年齢が低いと、本国同業他社の立地選択の影響を受けやすい。第3に、取締役会の株式所有の割合が低いほど、本国同業他社の立地選択の影響を受けやすい。第4に、取締役会におけるパワーの集中度が高いほど、本国同業他社の立地選択の影響を受けやすい。

(3) 国際事業経験と相互依存的投資行動の関係に関する先行研究について、幅広く検討を行った。そして、次の2点について指摘を行った。第1に、企業の国際経験に注目することで、LOF概念の内生的性質について接近することが可能となる。第2に、海外進出や立地選択に関する先行研究において、企業レベルで捉えられることの多かった国際経験・異文化経験に対して、個人レベル・グループレベルで接近することが重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 竹之内秀行	4. 巻 20
2. 論文標題 企業の海外進出と国際経験	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 異文化経営研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本崇雄	4. 巻 12
2. 論文標題 「新しさ」にどう対峙するか：新規事業創造に向けての再考	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 新潟県生産性本部会報	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 竹之内秀行、高橋意智郎、佐藤幸志
2. 発表標題 企業の国際経験と相互依存的投資行動
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第29回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹之内秀行、高橋意智郎、佐藤幸志
2. 発表標題 国際経験の評価・解釈と相互依存的投資行動
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第22回九州部会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 竹之内秀行、高橋意智郎
2. 発表標題 日本企業の海外進出と国際経験のタイプ
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第29回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹之内秀行、石井昌宏、高橋意智郎
2. 発表標題 海外進出のサドル現象に関する実証研究
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第21回九州部会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takenouchi, H., Ishii, M., and Takahashi, I
2. 発表標題 Isomorphism Pressure and Saddles in Foreign Direct Investment
3. 学会等名 The 6th World Conference on Production and Operations Management (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹之内秀行、石井昌宏、高橋意智郎
2. 発表標題 海外進出のサドル現象
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第16回中四国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋意智郎、竹之内秀行
2. 発表標題 日本企業の海外展開における柔軟性と企業内要因
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第28回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大東和武司、岸本寿生、竹之内秀行、山本崇雄、竹之内玲子
2. 発表標題 中堅・中小企業の海外進出
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第15回中四国部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹之内秀行、高橋意智郎
2. 発表標題 中国市場への進出における相互依存的立地選択行動と環境の不確実性 事業経験と参入モードの影響
3. 学会等名 日本経営学会関東部会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹之内秀行、高橋意智郎
2. 発表標題 日本企業の国際経験と立地選択
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第27回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤幸志、山本崇雄
2. 発表標題 国際社会起業家論に基づく新興国市場参入戦略：教育関連ビジネスを事例として
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第27回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岸本寿生、大東和武司、清水さゆり、アリフ・ヌルハザル・アザム
2. 発表標題 ローカル・中小企業の国際ビジネスのパラダイムシフト
3. 学会等名 国際ビジネス研究学会第27回全国大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 崇雄 (YAMAMOTO Takao) (30318761)	神奈川大学・経済学部・教授 (32702)	
研究分担者	岸本 壽生 (KISHIMOTO Toshio) (80262492)	富山大学・学術研究部社会科学系・教授 (13201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------